

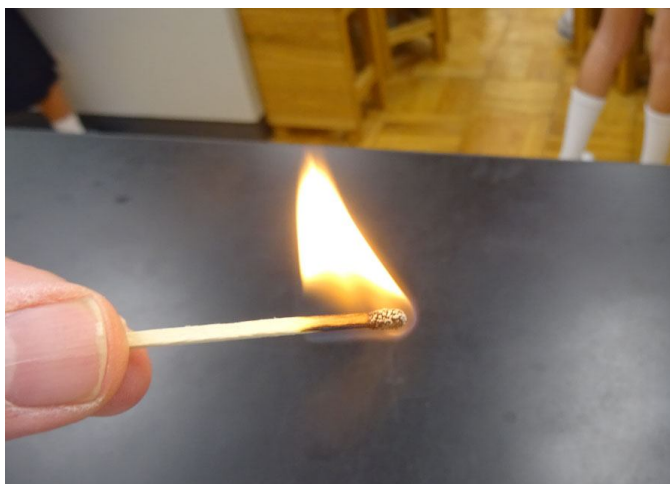
「絶滅危惧器具(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

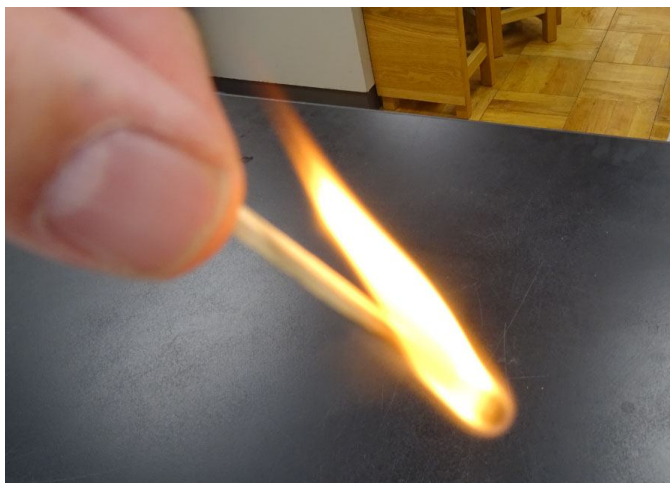
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

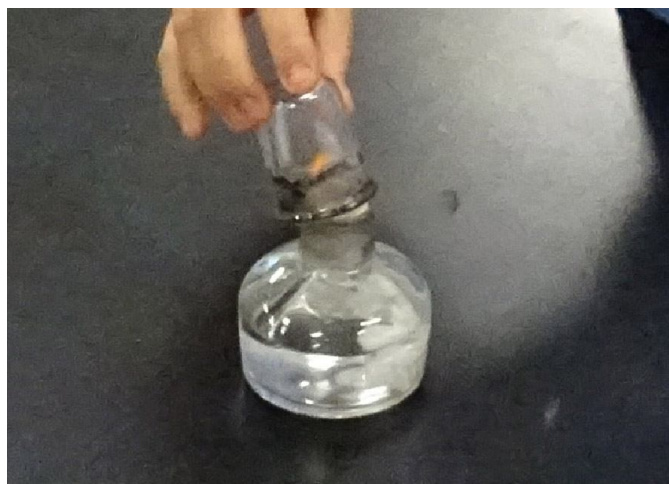
私が子どもの頃は、毎日のように使っていたマッチも、今はほとんど使われていない。お仏壇のロウソクに点火する時と、パイプタバコの愛好家、それに学校のアルコールランプぐらいだろう。



私は、小学校低学年の頃、父からマッチの安全な使い方の指導を受けた記憶がある。ハイキングで行った奥多摩の山だったような気がする。一番よく覚えているのは、「火がついたら、すぐに横に持つこと」という原則だ。こうすると、炎はゆっくりと木軸を伝わっていき、10~15秒は安全に燃焼する。



しかし、少しでも軸木を下に傾けると、たちまち炎が昇ってきて、指先を火傷する。炎の性質を知っていれば、当たり前なのだが、マッチに馴染みのない子どもたちにとっては、この怖さがわからない。実際にこの炎のようになって、初めて危ないと気付く。写真は私の指である。



ランプに蓋をして消火するのも一苦労だ。横からスッとかぶせるのが、子どもにとってはなかなか難しい。私は、消火を確認したあと、一旦蓋をとって、冷却するように指導している。



一連の使い方と安全の指導を終えて、各班で何度か練習したあと、「テスト」がある。机上の安全、ぬれぞうきん、アルコールの量や芯の高さ、マッチの点火・消火、アルコールランプの点火・消火の一連の作業が、すべて正しくできると、「認定証」をもらえる。一度で合格しない子どもも多かったが、授業時間中に全員が「認定証」を手にすることができた。これは、子どもにとって、良い体験だったと信じている。

【子どものノートから】

「私はマッチを、使ったことがあります。かまどで何か作った時です。かまどでやった時は、風があつて、なかなかつきませんでした。今日は、すぐについたけど、消す方が大変でした。でも、合格できてうれしかったです」

「アルコールランプは、すごくカッコイイです。中のアルコールは、水みたいに見えるけど、もえるからすごいです。先生が、東急ハンズで売ってるって言ってたので、ぜったいに買う」